

2つのオリンピックピツク

ある新聞記者の挑戦

中山英子(信濃毎日新聞社) 文
Eiko Nakagawa
木内達郎(ペンタトーン)
Illustration by Tatsuro Kuchi

自分が記事を書いたところで、何も変わらない。ナガノの熱狂が冷めゆく中、彼女は一人、無力感に苛まれていたそんな時、スケルトンに出会った。コースを滑り降りる快感のとりこになった夢中で滑り続けた。いつしかソルトレイク五輪代表選手へと上り詰めていた。

2002年2月20日。

ソルトレイク入りしてから16日目で、初めてとも思われる大雪。女子スケルトン史上初のオリンピックの舞台に、私は立っていた。

選手が待機するスタートハウス内は、ワールドカップとは違った空気が流れていた。いつもよりも穏やかに感じた。

スタートラインに立った瞬間、思っていたほどの緊張は感じられず、平静だった。どちらかというとほわーんとした感覚。

瞬く間に過ぎた1分間の快感は、タイムの悪さを忘れさせた。ゴール後は家族を見つめ、笑顔振りまいて手を振った。

観客の声援は滑っている最中は聞こえなかったけれど、その雰囲気はこれまでに体験し

時間は、選手だからこそ感じられる気持ちよさで、試合で滑走している時の次に印象的だった。しかし、着席して、いかにも米国的な音と光の華々しいエンターテインメントを見つめているうちに、さめた自分がいることに気づく。長野五輪の時の浮き立つようなあの空気と、閉幕後から現在に至るまでの、冷えた込んでいた街の様子、取材を通して感じた競技団体の沈滞化を思い起こさせたからだ。自分をソルトレイクまで導いた動機の一つには、長野五輪後に感じた疑問や社会の矛盾の原因を追究し、それを改善するために何が必要なのかを確かめたいという気持ちがあった。

予備校時代から「ビジネス主導型」ともいえる五輪に対していいイメージは持っていなかった。でも、スポーツ観戦は好きで興味があった。地元新聞社に就職したのも、長野五輪が口実だった。

大会開催時には、運良く現場で取材する機会を手えられたが、五輪後の夏に、運動部から文化部に異動になった。記者として五輪を盛り上げることに加担していた自分にも疑問をおぼえるようになった。

「ナガノは大成」と、方々で言われていたが、何が成功なのか、私には分からなかった。一部の競技では、競技人口が増えたという話を聞いたが、強化費が減って強化体制が後退していたり、選手を取り巻く環境も厳しくなっているケースが多いように感じた。

異動後も、ある競技団体の取材が続いた。自費で海外にも出かけた。遠征に参加できるスタッフが減り、選手の勢いもなくなっていくのを感じた。選手を責めることはできないが、ふがいないく見えた。自分が記事を書いてみたところで、何も変わらないということに無力感をおぼえ、とりあえず、彼らを追いかけることにひと区切りつけた。

その頃スケルトンを始めた。当時、スケルトンは五輪種目ではなかった

たことのないものだった。温かかった。応援を受けて走り抜ける気持ちよさは格別で「声援が背中を押してくれる」という使い古された言葉が急に真に迫ってきた。

選手村に帰ってきて自分の成績をじっくり見てからは、ショックで数日ぼんやりしていた。帰国後にビデオを見て、さらに落ち込んだ。やめた方がいいのかとも思った。

しかし、競技を本格的に始めて2年、ここまでこられた自分を「よくやった」と、元気づけることにした。

2月8日、ソルトレイク五輪の開会式。スボットライトを浴びて、大勢の観客の喝采を浴びながら、すり鉢状の舞台を闊歩しているが、長野県内では越後選手が中心となって細々と遠征を続けていた。競技人口も少しずつ増えていた。ワールドカップで上位の成績を残し始めていたため、沈滞化しているスパイラル(長野市のコース)を救う何かになるかも、という直感も働いた。

しかし自分が競技を始めた理由は、ただ体を動かしたかったことと、1回くらい滑ってみたい、という軽い気持ちからだ。

'99年の夏からスタート練習にあたる、陸上でのアッフェンスケルトンを試し始めた。

「怖くないですか」「生身でのスピード、勇気ありますね」「顔は大丈夫?」

こんな類の問いを多くの人から投げかけられる。答えは「怖くないです」。

コースから外れて投げ出されたという話は一度も聞いたことがない。私の知る限りでは大怪我も少ない。見た目は危険ではなく、安全性の高い競技だと実感している。

私は、初めて滑った99年の11月のある日から、スケルトンのとりこになってしまった。

1本目は感じたことのない重力に頭が振り回されたせいか、気持ち悪くなった。2本目には体が慣れてきた。それ以来、ゲレンデスキーにはまった時と同様の感覚で、仕事の合間や休みのすべてをつぎ込んだ。コースのある飯綱高原へ車でせせと通った。

1カ月もすると、速く滑りたいと思うようになった。肩とひざの4点を支え、お腹を少し浮かせている格好。ちよつとした動きが即座にそりに伝わる。慣れてくると、1分間の中で、さまざまなことが感じられるようになってきた。

そんなある日、スタート地点に立った時、突然恐怖感が襲ってきた。自分の内面を試さねられているような感覚をおぼえたからだ。弱さも強さも自分自身に突きつけられる。自分の心を裸にされたような思いだった。

当時、同じように「そり遊び」をしていた人たちの中で私はスタートタイムが一番速かった。競技としてのスケルトンに色気を感じ



始めていた。しかし、「競技として取り組んだら、大変なことになるな」とも感じていた。年が明けて1月。全日本選手権に出場し、6位になったことをきっかけに、競技者への道へとひきずりこまれていった。

競技スポーツに取り組むのは、高校3年生で陸上をやめて以来のことだった。

高校の3年間は、陸上一辺倒だった。100m障害。真っ黒に日焼けしながら、連日がむしやらに走り続けたが、個人では県大会を突破できなかった。「こんなに一生懸命やれるのは10代の今だけだ」と高校生にして勝手に決めつけていた。何も考えずにただ走っていたからだと気がついたのは、新聞記者として取材を始めてからだだった。

思春期だったこともあるが、体を動かすからよく食べた。だから体重も増えた。そして真っ黒……。そんな自分が大嫌いだだった。

大学生になると、洋服を買い始め、化粧もするようになった。でも、自分に満足はできなかった。仕事を始めてからも、自分を演出するためにお金をつぎ込んだ。

トレーニングは、約10年かけて自分にまつた「衣装」を、はぎ取っていく作業となった。ファンデーションは汗で流れるからやめた。化粧自体をしなくなった。日焼けはしたけど、それも気に入った。すっぴんの自分が気持ちよかった。

筋トレを続けることで、自分の身体が意志を持ち始め、太くなっても堂々と前にさらせるようになった。洋服を身体で着る感覚を得た。日々変わっていく自分の体と対話することで、飾らない裸の自分を大切に思えるよ

うになった。これこそスポーツがもたらしてくれた贈り物だと思った。仕事にも相乗効果をもたらした。身体が意志を持つことにより、頭の回転がよくなり、思考に幅が出た。トレーニングで感覚を駆使する過程で、体から書きたいことがでてくるような感じも持った。遠征先の欧米諸国ではフィットネスが盛んだと感じることが多い。運動が食事と同様の感覚で生活の中に取り入れられていく。彼らが素のまま洋服を着こなしたり、自分に対して自信を持ってられるのは、こんなところからも来るのではないだろうか。

日本チームの宿舎は選手村の、ふだんはユタ大の学生寮だという所であった。4階建てのひと棟を4カ国ほど使っており、1階と2階の一部の部屋を与えられた。ひとつの部屋は、リビングルームと化粧室のみ共有で、さらに4つの部屋に区切られていた。プライベートは完全に守られるようになっていた。私は、リユージュ、カーリング、フィギュアスケートの女子選手と一緒だった。

パソコン回線とテレビがある共有スペースや、メディアカールームでは、日本選手たちと連日話をする機会を持った。私とは10歳近く年齢が離れている選手も多かったが、前向きでしっかりとした考えに刺激を受けることもしばしばあった。その反面、五輪後の選手生活に不安を抱く姿にも出会った。

「オリンピック終わったら、どうしたらいいんでしょうかね」続けられるかわからないです。「今後どう生きていったらいいんでしょうか」――。

つい数時間前には華々しい舞台で大歓声を浴びていた選手の生の声を聞くたび、何と言葉を返したらいいのかわからなかった。

それまでは、子どものころから競技中心の生活を送ってきた選手たち。競技をやめたら、社会の中で、精神的にも物理的にも受け皿がまるでない。自力で頑張れといつても、「競技者」というカテゴリーの中で守られてきた若い彼らが急に世の中に放り出されるのは、あまりにも酷な話だ。

「メダルの数が少ないから、盛り上がりが悪い」という日本からの声も聞こえてきた。そんな声を聞くたびに頭を抱えるしかなかった。

学校教育の過程で、スポーツ本来の面白さを教えることができないシステムにも問題があるだろう。競技団体にも同様なことが言えるが、勝ちさえすれば、メダルをとれば、何でも手に入るという思いこみを選手に植えつけていることにも問題があるように思う。

選手自身がスポーツ本来の楽しみを知っていなかったら、観衆にそれらを伝えられるわけがない。

ソルトレイクに押し寄せた日本のメディアはアメリカに次ぐ人数だったがに違いない。私のところにも急に取材依頼が増えた。非常に疲れた。「これもオリンピック」と思うよりほかなかったが、多忙すぎたこともあって、ものすごく神経過敏になっていた。

「あなたもメディアの一員としてやってきたんだから、答えて当然でしょう」とも言われたし、それが役割だとも思ったけど、いら

一番いやだったのは「越選手を追いかけてスケルトンをやっている新聞記者の中山さん」というフレーズが強調されることだった。

いくら言葉をつくしても、作られた物語にはめられていることに苛立った。自分が競技を通じて伝えたいのは、そんなことじゃない。しかし、こうなってしまうのも、自分の力になさだと思ひ、あきらめた。スポーツ選手は身体でそれを伝えたいんだし……。

今、スポーツの世界では、メディアを厳しく選別して取材を受ける選手が増えている。生意気だ、と言われることもあるが、当然だと思つた。単なる一過性の話題として取り上げるメディアが多いからだ。

日本では音楽や芸術に親しむ文化も育ちにくい。その構造の一端を、メディアは担ってしまっている。ビジネスにならないものは注目されないシステムになっていることを、文化部で「芸能記者」を担当し実感した。社会は話題性や知名度のようなものを最重要視しているように感じるが多かった。

代表に決定してから、自分を取り巻く環境は一変した。自分自身の心はそんなに変わっていないのに、周りの見る目が変わっていった。お金もたくさん集まった。結婚式並みの壮行会も開いてもらった。うれしけれど戸惑った。自分を見失わないようにすることで精一杯だった。

私以外の選手たちにも当然同じ現象が起きているだろう。もしかすると、勘違いする若い選手も出てきちゃうかもしれない。スポーツに関わるものすべてが真剣に考えなければならぬことは山積みだと思ふ。

AFLO Foto



Eiko Nakayama

1970年9月28日、長野県生まれ。高校では陸上競技に取り組んでいた。早稲田大学入学後、陸上競技スポーツを中断し、学内スポーツ新聞、「早稲田スポーツ」に所属記者として体育会を退いた。大学卒業後、信濃毎日新聞社に入社。運動部時代に'98年長野冬季五輪を取材。ボブスレー、リュージュを担当した。翌年、越前宏選手との出会いをきっかけにスケルトンを始める。ソルトレイク五輪12位。